伝統工芸に新しい風

白河だるま総本舗　３００年の挑戦

ちから八起新聞

白河だるま調査団

白河だるま総本舗
・従業員　18人
・年間生産量
　だるま　10万個以上

喜ぶ顔を見るために

東日本大震災から8年たった今、福島県白河市の「白河だるま総本舗」は新たな取り組みで前進し続けている。被災地への支援の動きを「だるまが注目される」と前向きに考える渡辺幸子さん、その息子で十四代目の渡辺高章さんは、日々チャレンジをやめない。これからどんなアイデアでどんな素敵なだるまが誕生するか楽しみだ。（高橋寧）

震災のあと、いわき市など浜通りでは、昔から住んでいた人が減り、だるまが売れなくなった。

白河だるま総本舗は、だるまを手にする人が放射線の心配をしないように、「重し」にする土を県外産に変える工夫をして、風評被害を防いだ。

「被災地を支援したい」という多くの人たちからのオリジナルだるま発注は、しだいに増えていった。だるま作りの技術を生かした幅広い世代向けの商品は今、製作が追いつかないほど注文がきている。（高橋寧）

職人達の絵付け作業

五輪公式商品　だるみくじ

世界の色々な世代に

白河だるま総本舗のオリジナル商品「だるみくじ」は、ミニだるまと「おみくじ」入りのカプセルトイ。縁起物、昔話、深海魚、水族館シリーズがある。外国人や若い人にも白河だるまを知ってもらう新しい取り組みだ。県内や、首都圏の商業施設やコンビニ、ホテル、観光地などに合わせて200台置かれている。

2020東京オリンピック、パラリンピックの公式ライセンス商品も人気だ。高さ8・5センチ、金と白の2種で金が3240円、白が2160円で、全国の公式ショップと、オンラインで購入できる。（湯田凪咲）

「だるみくじ」

五輪公式ライセンスの白河だるま

白河だるまの特徴

顔に**鶴亀松竹梅**

白河だるまは300年の歴史がある。白河藩主松平定信が絵師の谷文晁（ぶんちょう）に描かせたのが始まりとされる。

幸運の象徴とされている「鶴亀松竹梅」が顔の中に描写されているのが最大の特徴だ。

鶴はまゆ毛に、亀はひげに、松と梅は耳の下のひげに、竹はあごひげに、それぞれ描かれている。

また通常の張り子の「型」は木で作られるが、白河だるまは粘土をこねて素焼きにした「土型」で作られている。瓦職人が作り始めたためだという。（小檜山里奈）

白河だるま総本舗

渡辺さん親子に聞く

渡辺幸子さん（写真左）

一番うれしいのは、だるま市のお客さんが、私たちの顔を見に来てくれること。お互いに「1年無事だったんだな」「また来年ね」と言葉を交わし、つながっている実感がする。新たな商品では、職人たちの企画力、デザイン力が高いのが強みだ。だるまを上手に作るためには器用さだけでなく、線を素早く描く「度胸」も大切。

渡辺高章さん（写真右）

私たちのチャレンジは、だるまを作り始めた300年前から続いている。「よし、だるまを作ろう」と始めた先人はすごい挑戦をしたのだと感じる。これからは、若い世代の皆さんや外国人にも手にしてもらえる民芸品を増やしていきたい。

「だるみくじ」のようなカプセルトイも、いろいろな世代にだるまを買ってもらえるきっかけになっている。（チーム全員）

やってみよう絵付け体験

絵付けを体験した記者

白河だるま総本舗では、だるまの絵付け体験ができる。赤、白のどちらかを選べる。

赤なら、おなじみの伝統だるまに挑戦できる。白を選ぶとオリジナルのだるまが作れる。この体験をすると、職人の技術に触れられる。いいお土産にもなる。（金田巧）

絵付け体験
■場　所　白河市八竜神98
■時　間　10：00～16：30
■定休日　不定休
■料　金　600円（税込み）
■所要時間　1時間程度
■駐車場　有り
■団　体　70人までOK
■予約電話　0248-21-8790

私たちが作りました

大変忙しい中、私たちの取材に協力してくださった皆さま、ありがとうございました。

（写真右から）

高橋　寧（白河第二中学校　2年）
白河だるまの数多い魅力をこんな形で知ってもらえてよかった。

小檜山　里奈（鏡石町立第一小学校6年）
白河だるまのことをたくさん知ることができてよかったし、楽しかった。

金田　巧（西郷村立熊倉小学校6年）
今回、絵付け体験をして職人たちの技術、度胸を感じることができた。

湯田　凪咲（白河市立みさか小学校6年）
だるまの絵付けや、オリジナルの商品のことを知れてよかった。